

たゝせ給ふ。卯の花おどりの鎧に、鍬形の兜たてまつりて、大矢おひておはする。妙法院の宮は、すゞの御衣の下に、萌黄の御腹巻とかや著給へり。大納言は、からの香染の薄物の狩衣に、けちえんに赤き腹巻をすかして、さすがに詩繪の細太刀をぞはき給ひける。六波羅より、帝こゝにおはしますと心得て、武士ども多く参りかこむ。山法師も戦ひなどして、海東とかやいふつはもの討たれにけり。事の初めに、ひむがし失せぬる、めでたゝなどぞ言ふめる。かゝれども、帝笠置におはします由程なく聞こえぬれば、計られたてまつりにけるとて、山の衆徒もせうく、心かはりぬ。宮々も逃げ出で給ひて、笠置へぞまうで行き給ひける。大納言は、都へまされおはすとて、夜深く志賀の浦を過ぎ給ふに、在明の月隈なく澄みわたりて、寄せかへる浪の音もさびしきに、松吹く風の身に

しみたるさへ、とりあつめ心ほそし。

思ふ事なくてぞ見まほのふと

ありあけの月の志賀の浦浪

其の後辛うしてぞ笠置へはたどりまおられける。

かやうの事ども、例のはや馬にて、あづまへ告げやりぬ。たゞ今の將軍は、むかゝ式部卿久明親王とて、下り給へり。將軍の御子なり。守邦親王とぞ聞こゆる。相摸守高時といふは、病によりて、いまだ若けれど、一とせ入道して、今は世の大事どもいろはねど、鎌倉のぬゝにては、あめり。心ほへなどもいかにぞや。うつゝなくて、朝夕好む事とては、犬くひ田樂などを愛しける。これは最園寺入道貞時といひしが子なれば、承久の義時より八代にあたり。この比私の後見には、長崎入道圓基とかやいふ者あり。世の中の大

小事、たゞ皆この圓基が心のまゝなれば、都の大事かばかりに成りぬるをも、かの入道のみぞ、とりもちて掟て謀らひける。重き武士ども多くのほすべしと聞てゆ。大かた京も鎌倉も、さわざのしる様けしからず、承久の昔も、かくやと今更に思ひやらる。持明院殿には、春宮おはしませば、思ひの外にめでたかるべき事なれど、けふあすはいまだ軍のまされにて、何のさたもなし。御殿居の者の、うべしきもなく、離れおはしますも、あぶなき心ちすればにや。せめても六波羅ちかくとて、六條殿へ、本院新院春宮引きつゞきて移らせ給ひぬれど、日にそへて天の下さわざ、おそろしき事のみ聞てゆれば、猶これもあるやうしとて、六波羅の北に、代々の將軍の御料とて、造りおける檜皮屋ひとつあるに、兩院春宮参らせ給ふ。大かたはいと物しきやうなれど、よろしき時こそあ

れ。かばかりの際には、何の儀式もなかるべし。笠置殿には、大和河内伊賀伊勢などより、兵ども参り集ふ。なかに事の初めより、頼みおほされたりし楠木兵衛正成といふ者あり。心たけくすくよかなるものにて、河内國におのが館のあたりを、いかめしくしたゝめて、このおはします所も、危からん折は、行幸をもなく、きこえんなど用意しけり。あづまのえびすども、やうく攻めのほる由きこゆ。もとより京にある武士ども、我れさきにときほひ参る。木の丸殿には、さこそいへむねくしき者なし。いかになりゆくべきにかと、いと物心ほそくおほしみだる。我が御心もて、事なれば、かこつ方なけれど、ふる郷の空もあはれに、おほしいでらる。秋も深くなり、ゆくまゝに、山の木の葉のうちぐれ、谷のあらしのおどづるも、かた^敵たきのきほふかと肝を消す御すまゐ、いつ

いか御身をかへたる心ち給ふもあぢきなし。
うかりける身を秋風にさそはれて

おもはぬ山の紅葉をぞ見る

すでにあづま武士ども雲霞の勢ひをたなひきのぼる由きこゆれば笠置にもいみじうおほしきわぐもとよりいとけはしき山の深きつゝらをりをえもいはず木戸逆木石弓などいふ事どもしたゝめらる。さりともたやすくは破れじと、たのませ給へるに、うしろの山より御かたきくづれまわりて、木戸ども焼きはらひ、おはしますあたり近く、すでに煙もかよりければ、いまはいかせんにて、あやしき御姿にやつれて、たどりいでさせ給ふ。

◎消息文

消息文とは、女子の間に行はれし書牘文なる由、既に云へり、扱男子の書簡には、漢文体を用ひたる由も、前に述べたるが、當時に至りては、漢文のいたく衰へたる程に、男子の間には、往來文とて、和漢混交の一体起り、大方これを用ふるを例とせり、因みに庭訓往來の中より一文を抄出して、その文例の一斑を示すべし。この庭訓往來といふは、足利時代に出來し書にて、玄慧法印の作なりと云ひ傳ふれど、其れよりは後ならむと思はるゝ由あり。

面拜之後、中絶良久、遺恨如山、何時可散、意霧哉、併似隔胡越、猶以千悔々々、抑醒翻雲林院、花濃香芬々、句已盛也、嗟峨吉野之山、櫻開落交、條其梢繁、難默止者、此節也、爭徒然而送、光陰哉、花下好士、諸家之狂仁、如雲似霞、遠所之花者、乘物僮僕、難合期、先近隣之名花、以歩行之儀、思立事候、雖爲左道之標、以異跡之形、明後日御同心候者、本望也、連歌、宗匠、和歌達者、一兩輩可有御誘引、以其次詩聯句之詠、同所望候、破籠小竹筒者、自是可隨身、硯懷紙等者、可被懷中、歎如何、心底之趣、難盡紙上候、併期參會之次、不具謹言、

二月廿三日

卿正忠三善

然れども、内々の往復には、男子もなほ假名かきの消息文体を用ひし事もありつと見ゆ。さて左の文中にて、首に出し、袈裟の遺書は、源平盛衰記にあるを、八洲文藻にも載せられたり。されど誠に袈裟女のかけるか、いか、盛衰記の著者の作にはあらじか。

袈裟女より母に送る文

去ぬだにも、女は罪深しと承り侍るに、憂き身ゆゑに、あまたの人失せぬべければ、我が身一つを失候ぬ。獨残留御座て、歎き思召さんところ、痛しく侍れ。なにごともし、然るべき事と申しながら、先立ちまわりぬる悲さよ。相構へて、後の世よく吊て給らむ。佛になり侍りなほ、母御前をも渡をも、必迎へ奉るべし。よろづ細に申したく侍れども、落涙に水莖の跡見え分かず。露深き、淺芽が原に迷ふ身の、

いと、暗路に入るぞかなしき。

源頼朝公より範頼に遣す文

十一月十四日御文、正月六日到来、今日從是脚力を立てんと候ひつるほどに、此の脚力到来、仰遣ける旨、委しく承候畢、筑紫の事、などか從はざらんとこそ思ふ事にて候へ。物騒しからずして、能々國に沙汰し給ふべし。構へて、國の者どもに、にくまれずしておはすべし。馬の事、誠にさるべき事にてはあれども、平家は常に、傾城うかふ事にてあれば、もいおのづから、道にて押しどられなど、いたらん事は、聞耳も見苦しき事にて、あらんずれば、つかはさぬ也。又内藤六が周防のせいを以て、志をさまたげ候以外、事也。當時は、國の者の心を破らぬ様なる事こそ、吉事にてあらんずれ。又八島御座、大やけ、并に二位殿、女房たちなど、少くもあやまり

傾城さか
きたれど
形勢の
也

あゝさまなる事なくて、向へどり申させ給ふべし。かくとだにも、披露せられれば、二位殿などは、大やけをぐまわらせて、向さまにおはする事もあるらん。大方は、帝王の御事、いまに始めぬ事なれども、木曾は、やまの宮鳥羽の四宮討ち奉せて、冥加つきて失せにき。平家又三條高倉宮討奉て、加様にうせんとする事なり。されば能やうたゝめて、敵をもらさずして、閑に可被沙汰也。内府は極て憶れ病におはせる人なれば、自害などはよもせられじ。生どりに取て、京へぐして上べし。さて世のすゑにも言傳てあらば、いまは吉事なり。返々此の大やけの御事、おほつかなきとなり。いかにもくして、事なきやうに、さたせさせ給べし。大勢どもにも、此由をよくく仰含られ候べし。穴賢く、

さては侍共カキに構く心々にならずして、有べき由、能々被仰べし。

構かまへて、筑紫のものどもにも、にくまれぬやうに、ふるまはせ給べし。坂東の勢をば、はねとじて、筑紫のもの共をもて、八島をば責させて、無念やうに、閑に沙汰候べし。敵よわくなりたると、人の申さんに付て、敵あなづらせ給ふ事返々有べからず。構く敵をもらさぬ支度をして、能やうたゝめて、事を切せ給べし。猶かへすく大やけの御となきやうに、沙汰せさせ給ふべきなり。二月十日のころには、一定舟をば上する也。佐々木三郎、筑紫へは下たがりたるによて、下しき。備前、兒島をば、責落したるなり。構くて、いかにも物騒くからずして、閑に軍におほすべし。侍どもの事、これによりかれによりなどして、さゝやきなどして、人に見うとまれ給べからず。又路々の間、兵糧なくなりたるなど、京より方かたにうたへ申せども、さほどの大勢の軍糧料にて、上らざりしかば、争

かはさなくて有るべきとおもふなり。坂東にも、其の後別事もなし。少しも騷事候はず。委しくは此雑色に仰合候ぬ。恐々、

千葉介とに軍にも高名してけり

大事にせられ候べし

此の文は、消息文体の中に、いさゝか往來体をも加へたる所あり。あながちに文章のよきとて、出だしたるにあらざ。唯その頃普通道往復文の体を、示さんどてなり。

信長公より藤吉郎が女どもに與ふる書

仰の如く、こんどは此地へはじめてこゝげさんに入、うちやくに候。殊にみやげいろくうつくさ中、目にもあまり筆にもつくしがたく候。うざばかりに、このはうよりも、何やらんと思ひ候へば、そのはうより見事なる物もたせ候間、べちに心ざし

ごん五は
音語也

はげれす
とさす

はは下
らむ入
なり

なく候まよ、まづく此たひは、とめり。重ねてかへりの時、それいたがふべし。就中それのみめ、ふりかたちまで、いつぞや見り、折ふしよりは、十の物、甘ほども見あげ候。藤吉郎れんくふそくのむね申のよ、ごん五だうだん、くせとに候歟。いづ方をあひ尋ね候とも、それさまほどの、又二たひかのはげねずみ、あひもどめがたきあひだ、これよりいでは、みもちをようくわいになし、いかにも、かみさまなりに、おもく、りんきなどにたち入候ては、然るべからず。但し女のやくにて候あひだ、申もの、申さぬなりにても、なしく、かへるべく候。なほぶんていにはむいり、はいけんこひねがふものなり。又々かく、

秀吉太閤より細川民部法印に遣す文

わざと申しつかはし候。かうらいへこゝ候はん前に、申つけ候は

ん事おそく候まゝ正月五日すぎ候はゞ十日より内に其方をた
ちにてこゝ可申候。此方には五日のとうりうたるべく候まゝ其
心にていそぎこゝ可申。又ふゝみのさゝづもたせ、大くのがてん
いたゝ候き、一人めゝつれ候て、こゝ可申。伏見のふゝんな、大事に
て候まゝ、いかにもへんとうにいたゝ可申旨、いそがしくきさゝ
つゝ、大く一人めゝつれ候て、こゝ可申。みやげなど候て、こゝ候は
ゞ、くせをにて候まゝ、其よういすこゝも、致ゝ候まじく候。むまの
り二人ばかりめゝつれ、道のさうさなきやうに、いたゝ候て、こゝ
可申。いぜんくわんはく殿より、正月の禮に人よこせ候はゞ、よゝ
だをめゝつれ、こゝ可申候。伏見のふゝんの事、ねんごろに申つけ
たく候以上、

くわんは
とくは秀次
とさす

◎物語文

物語文は、前段軍記文の條にも、いさゝか云へりし如く、公家の式微と共に全く
廢れ、一變して、軍物語のもてはやさるゝ事となり、鎌倉時代には、僅に撰古の小
冊子二三種に、むかしの倂を遺すに至りぬ、鳴門中將物語、秋、夜長物語などいへ
るが即ち當時の初めに出来しなれど、前代に比すれば、文章の下れるは更なり、
趣向も拙く、わづかに一小冊中に、ありのくだりを綴れる迄にて、宇津保源氏の
類の如く、伏線照應など細かに構へて、前後數篇にわたれる、大部の書とては、見
るをあたはず、後に判官物語、曾我物語、義經記の類出来しは、幾分の事實に基つ
き、軍記よりは潤色を加へ、趣味を増したる、一種の小説にして、云はゞ古物語の
脈を傳へて、沿革せしものと思はる。左に抄出する文は、全く右の物語類とは異
なれども、なほ物語の稱ありて、撰古の文章として、はよろしきものとの評あれ
ばなり。

(一)唐物語

唐物語は、西行法師の作と云ひ傳ふれど、確評なし、記せる事からは、漢土にあり

し昔物語にて、長恨歌琵琶行などの旨意を、轉譯したるものなれば、幾種の物語をも集めたるなれど、鳴門中將の類に比ぶれば、數等まさる文章なれば、いさゝか茲に引出で、示すべし。

王子猷友を訪ひてあはず

むかゝ、王子猷、山陰といふ所に住みけり。世の中の渡らひにほだされずして、たゞ春の花秋の月ののみ、心をすま一つ、多くのと一月をおくりけり。事にふれて、なさけ深き人なりければ、かきくもりふる雪、はじめては、月の光り清くすまじき夜、ひとり起きおて、慰めがたくやおほえけん。高瀬船に棹さ一つ、心にまかせて戴安道を尋ね行くに、道のほど遙けて、夜もあけ月もかたぶきぬるを、ほいならずや思ひけん。かくともいはで、門のもとよりたち歸りけるを、いかにと問ふ人ありければ、もろとも、月みんとこそ思ひつれ。

かならず人に、あはむものかは。

とばかりいひて、つひにかへりぬ。心のすきたるほどは、これにて思ひくるべし。戴安道は、剡縣といふ所に住みけり。此の人の年でろの友なり、同じさまに、心をすましたる人にて、なん侍りける。

朱買臣妻に離る

むかゝ、朱買臣、會稽といふ所に住みけり。よに貧しくわりなくて、せん方なかりければ、ふみ讀み物習ふ事、よるひる怠らず、其のひまには、たき木をこりて、世を渡るはかりごとをいけり。かくて年月をふるに、相具たりける女、限りなくまづき住居を、堪へがたくや思ひけむ。我れも人も、あらぬさまになりて、世を試みんなど、こまやかに打語らひければ、かくてもや有りはつべき。猶こどいばかりは、心づよくあひねんぜよと、よろづにこゝらへけれ

ども、遂に聞かで、其の年のうちに離れにけり。男戀ひ悲しめども、いふかひなくて、次の年にもなりけり。この人のさえ、才學よにすぐれたる事を、帝聞かせ給ひて、その國の守になされぬ。初めて國にくたりける有様、心言葉も及ぼす、めでたかりけり。かゝれども、猶ありし妻の心をかけて、一國のうちを尋ね求めさすれども、似たる人なくて、明かし暮らすに、野にいでし狩しあそびける時、こどもなのめならず、あやしくわびげなる賤の女が、かたみといふ物を臂にかけて、菜を摘みて、おざりありくを、ゆゝいげの者の有様やと見るほどに、我が昔の妻と見なしてけり。猶ひが目によと、目をとめて見るに、いかにもたがふ所なかりければ、人いれず悲しくおぼえて、暮るゝやおそきと、呼ひとりてけり。女、我れあやまつこどもなきに、いかなる事にか當りなんずらんと、恐れ

惑ひけれど、有りし昔のなどを、こまやかに語らひければ、女あさましくおぼえて、この夫をうち見るより、いかにおもひけん。いたく憐みわづらひて、暁がたに、絶え入りけり。

もろどもに、錦をきてぞかへらまし、

ヒトニシメガワイ
うきにたへたる、心なりせば。

心みじかきは、何事につきても、くちをき事にこそ。錦をきて故郷にかへるとは、此の人の事なり。

(三)判官物語は、作者詳ならねど、鎌倉時代の末に出来たるものならむ。義経記は、全く此の書に基づきて、枝葉を添へたるを著し、そもく此の物語は、体裁文章ども、曾我物語、義経記と、同じ程と見ゆれど、此の物語に限り、寫本にて行はれ、世に少き書なれば、一節を抄出すべし。

鶴が岡の社頭に靜舞ひかなつる條

靜其の日の装束には、白き小袖一重ねに、唐綾を上引重ねて、白
 き袴ふみいだき、わり菱縫ひたる水干に、たけなる髪高らかに結
 なして、此の程の歎きに面瘦て、薄化粧眉細やかにつくりなく、皆
 紅の扇を開き、ほう殿に向ひて立たりけるが、流石鎌倉殿の御前
 にての舞なれば、おもはゆくや思ひけん。舞兼ねてぞやすらひけ
 る。二位殿はこれを御覽じて、去歳の冬四國の波の上にてゆられ、
 吉野の秋風に吹かれ、今年は海道の長旅にて、瘦衰へ見えたれど
 も、靜を……にも我朝に、女ありとも覺えねど、仰られける。靜其の
 日は白拍子多く知りたれども、殊に心に染むものなれば、迅んむ
常むやうの曲といふ、白拍子の上手なりければ、心も及ばぬ聲音に
 て、はたとあげてぞ謠ひける。上下あつと感ずる聲、雲にも響くば
 かり也。近くは聞て感むけり、聲も聞えぬ山までも、さころ有らぬ

靜其の下
へし文なる

とてぞ感むける。ゑんむむやうの曲、なからばかりかぞへたりけ
 る所に、祐經心なくとや思ひけん。水干の袖をはづして、せめをぞ
 打たりける。靜君が代のとありければ、人々之を聞て、なさけなき
 祐經かな。今一をり舞はせよか、とぞ申ける。詮ずる所、敵の前の
 舞ぞか。思ふ事を謠は、やと思ひて、

あづやうづくのをだ巻くりかへし、

昔を今になすよしもがな、

よしの山峰のしら雪ふみわけて、

入りにし人の、あとぞこひしき、

と謠ひたりければ、鎌倉殿みすきさつとをろし給ひ、白拍子は興
 さめたるものにて有りけるや。今のまひ様、歌のうたひ様けし
 らず。頼朝おなかうとなれば、聞知らむとて歌ひける。しづのをだ

まき繰返すとは、頼朝が世盡きて、九郎が世になれどや。あはれおぼけなく覺えたる物かなど、御氣色かはりければ、静またお返し。

よ一の山峰のしら雪ふみ分て、

入に一人の、あと絶えにけり、

と謠ひければ、御簾高らかに上げさせ給ひて、かろくも褒めさせ給ふ物かな。いふかさきもあり……二位殿より、御ひきで物ひろ蓋に置き給はりけり、鎌倉殿より貝摺たる長持三えだ給はり、宇津宮二えだ、小山の左衛門二えだ、樂頭三人して九えだ、其の外一えだ二えだ、ぶたひの廻りに破子を并べて居ゑたり。長持のきりやうならぬ人は、小袖もて来てさくおき、直垂を投出し、などける程に、小袖の山をぞつみたりける。相良の十郎承

「いふか
さきもあ
りこのあ
かむ脱

りて、ゆるたりければ、長持六十四えだとぞ記しける。静これを見て、我れ祿をどらんために舞ひたらば、判官殿の命のためにこそ舞ひたれ、長持を一えだも残さず、若宮の修理のために参らせけり。小袖直垂も一つもちらさず、我君のけう養のために、大御堂へ参らする、やがて堀の刀自が屋かたへかへり、明くれば、鎌倉殿に暇申しければ、心ある侍士ども、堀の刀自が屋形へ行き、さまざまに慰めけり。鎌倉殿より百物百をぞ給はりける。やがて親家承りて、五十餘騎の勢にて、都まで送りけり。静わが君の歎き深かりければ、道すがら千僧供養をしてぞ上りける。北白川の宿所にかへりてあれども物をもはかしく見いれず、うかり事の忘れがたければ、問ひ來る人も物うとて、たゞ思ひ入てぞ有ける。母の禪師も慰め兼ねて、いと、思ひ深く、明暮は持佛堂に引籠り、

經を讀み佛の御名を稱へてありけるが、かゝる憂き世にながらへても、何かせんとや思ひけん、母にもいらせず髪をきりて、天りう寺の麓に草の庵を結び、禪師諸共に行ひすまゝしてぞ有ける。心なさは人は人に優れたり。惜しかるべき年ぞかゝ、十九にてさまをかへ、次の年の秋の暮に紫雲たなびき音楽うらに聞えて、往生の素懷をぞ遂げにける。禪師も程なく、ともに成佛しけるとかや。

なほ此の外鎌倉時代の始より行はれし繪巻物の詞書も、昔の物語文の一變せしものと覺し、まづ鎌倉時代には小柴垣草子詞書爲家御書藤信實地獄草子(詞書寂蓮法師繪土佐光長)吉備大臣入唐草子(詞書兼好書光長)の類あり、足利時代に至り、福富草子(詞書未詳書土佐光信)音なし草紙(詞書畫工共未詳化物草紙)詞書未詳書土佐光持の類あり、此の類の草紙を集めて、御伽草子とて其の世にはいたく行はれしものなり。これは繪入の慰み本にして、上流社會にもてはやされしなり。抑々繪巻物は、畫をこそ主とすれ、趣向文章は、さまで撰ぶをなけれ

ば、詞品やうやく下りて、文學の書としては、價値薄し。唯その名の如く、婦幼の御伽話したるに過ぎざるなり。然れども、是れこそ後世の繪入小説すなはち草雙紙類の權輿にてはありけり。

足利時代の末に、鳥部山物語松帆、浦物語などいふあり、一冊の短篇なり。其の趣向は、余が小説史稿の中に記しおけり。又常盤姫物語といふ滑稽小説も、此の頃の物なるべし。いづれも文章さまでなきものなれば、こゝに載せず。

◎日記文

鎌倉時代の日記紀行の類には、辨内侍日記、中務内侍日記を始め、源光行の海道記、源親行東關紀行など、其の書に乏しからねど、皆さしたるともなかるべし。足利時代に至りては、二條良基公の小島の口すさみ、今川了俊の道ゆきぶり、僧正徹のなぐさめ草、道興准后の回國雜記などあれど、こゝには唯二書を引くべし。まづ鎌倉時代にては、尤よしと云はるゝ十六夜日記を抄出し、足利時代にては、

一條禪閣の關、藤河の記を掲ぐべし。此の記と眞基公の口すさみと、俊劣を見ねば、何れをかと撰びわづらひしかど、小島のすさみは、南北朝兩立の頃にて、早きに過ぎたり。藤河の記こそ、中頃の書にて、時代恰好なれば、これと定めつ。それより末、北條氏康の武藏野紀行、蒲生氏郷の紀行の如き、文品いたく下れり。

(二十六夜)日記

此の日記の作者は、阿佛尼とて、始め高倉天皇の皇孫女、安嘉門院の方に仕へ、後に藤爲家の後妻となりて、爲相爲守らを生めり。掇爲家歿後、先妻の子爲氏不孝して、播州細川の莊を押領し、爲相に讓らざりしかば、其の理を訴へんとて、鎌倉に下りし時の紀行なり。其の時鎌倉の執權職は、相摸守時宗なりと。

本書の文体は、古文の風に倣ひてかけるなれど、さすがに時代隔りての筆なれば、自然と當時の文勢に化せられ、龜鑑といへる漢語を「かめのかみ」と強ひて雅言めかしてかけるなど、珍らしき詞づかひ交れり。心を注げて見るべし。

昔、壁の中よりもとめ出でたりけん書の名は、今の世の人の子は、

孝經と云は

阿佛尼の
夫爲家の
家の父定
家に二共
に二度共
め集うけ
り集うけ
て撰

ゆめばかりも、身の上のことよは、いらざりけりな。みづぐきの岡のくず葉、かへすぐもかきおく跡た、かなれどもかひなきものは、親のいさめなりけり。又賢王の人を捨て給はぬ政事にも、これ、忠臣の世を思ふなさけにも棄てらるゝものは、數ならぬ身ひとつなりけり。と思ひ知りながら、又さて、もあらで、猶、此の憂へこそやるかたなく、悲しけれ、更に思ひ續くれば、やまと歌の道は、唯、まことのこと少なく、あだなるすさひばかりと思ふ人もやあらん。日の本の國に、天の岩戸開け、四方の神たちの神樂の詞を、はじめ、世を治め、ものをやはらぐるなかだちとなりける。とぞ、此の道のひじりたちは、記し置かれたりける。さて、又、集を撰ぶ人は、ため、多かれど、二たび勅をうけて、世々に聞えあげたる家は、たぐひなほありがたくやありけん。其のあとに、もたづ

さはりて二人の男ども、百千の歌のふる反故どもを、いかなるえ
 にかありけむ。あづかりもたることあれど、道をたすけよ。子をば
 ぐよめ、後の世をどへとて、深き契りを結ひ置かれし、細川の流れ
 も、ゆゑなくせきとめられしかば、跡とふ法のともし、火も、道を
 守り、家をたすけむ。親子の命も、諸共にきえを争ふ。歳月をへて、危
 ぶく心細き物から、何とてつれなく今日までは、ながらふらん。
 惜しからぬ身ひとつは、やすく思ひ棄つれども、子を思ふ心の暗
 は、猶ほ忍び難く、道を顧みる恨は、やらん方なく、さても猶、東の龜
 の鏡にうつさば、曇らぬ影もやあらはるよと、せめて思ひ餘りて、
 萬のはかりを忘れ、身を益なき物になしはてし、ゆくりもなく、
 いさよふ月に、さそはれいで、なんとぞ思ひなりぬる。さりどて文
 屋の康秀が、さそふ水にもあらず、むべき國もとむるにもあら

ず。頃はみ冬たつ始めの、定めなき空なれば、降りみ降らずみ時雨
 もたえず、あらしにきほふ木の葉さへ、涙と共に亂れ散りつゝ、事
 に觸れて心細く悲しけれど、人やりならぬ道なれば、いきうと
 ても、止まるべきにもあらで、なにとなく急きたちぬ。めかれせさ
 りつる程だに、あれまさりつる庭も、離も、まゝと見まはされて、
 慕はしげなる人々の袖の雫も、慰めかねたる中にも、侍従為相大夫為守な
 どの、あながちに打ちくしたるさま、いと心苦しければ、さまざま
 云ひこしらへ、ねやの内を見れば、昔の枕さへ、さながらかはらぬ
 を見るにも、今更悲しくて、傍に書き付く。

とめおくふるき枕の塵をだに、
我がたちさらば誰れか拂はん。

代々にかきおかれける歌のさういどものおくがきなどして、あ

だならぬ限りを撰り認めて侍従の方へ送るとて書き添へたる
歌、

和歌の浦に書きとめたるもほ草、

これを昔のかたみどもみよ。

あなかりこよこ波かくな濱千鳥、

一方ならぬあどを思はす。

是れを見て侍従の返り言いとよくあり。

つひによもあだにはならじ藻鹽草、

かたみをみよの跡にのこせば。

まよはまゝをへざりせば濱千鳥、

ひとかたならぬ跡をそれども。

このかへりごと、いもおどなくければ、心やすく哀れなるにも昔

の人に聞かせ奉りたくて、又打ちほたれぬ。大夫の傍去らず泣
きつるを、ふり捨てられなん名残、あながちに思ひ知りて、手なら
ひいたるを見れば、

はるぶと行くさき遠く慕はれて、

いかにそなたの空をながめん、

と書き付けたるものよりことにあはれにて、同じ紙に書き添へ
つ。

つくぐと空なすがめをこひくば、

道遠くともはや歸りこむ。

とぞ慰むる。

子どもの歌、残りなく書きつけぬるも、且はいとをこがまけ
れど、親の心には、あはれに覺ゆるまゝに、かき集めたり。さのみ心

弱くても、いかゞとてつれなくふり捨てつ。粟田口といふ所より、
車はかへつ。程なく逢坂の關越ゆる程に、

定めなき、いのちは知らぬ旅なれど、

またあふ坂と、たのめてぞ行く。

野路といふ所は、こゝ方行く先、人も見えず。日は暮れかゝりて、い
と物がなうと思ふに、時雨さへうちをよぐ。

うちいぐれ、ふる里思ふ袖ぬれて、

行く先遠き、野のゝの原。

こよひは、鏡の宿といふ所につくべいと、定めつれど、暮れはてゝ
行きつかず。もり山といふ所にとゞまりぬ。爰にも、時雨なほいた
ひ來にけり。

いとゞ猶袖ぬらせとや宿りけむ。

まなくいぐれの、もり山にゝも。

今日は十六日の夜なりけり。いとくるゝくて臥しぬ。いまだ月の
光りかすかにのこりたるあけほのにもり山をいでゝゆく。やす
川わたるほど、さきだちてゆく旅人の、駒の足音ばかりさやかに
て、霧いとふか。

旅人は、みなもろともにあさたちて、

駒うちわたす、やすの川霧。

(二)關、藤河の記

此の書は應仁の亂より都の騒がしきを避けてしばらく奈良の舊郷におはし
ける禪閣の美濃の國にさるべき縁りのあるがりかりそめに往き還り給ひし
程の紀行なり。歌多く詩はた所々に見ゆ。古文体の一變して漢語も聊交りたる、
當時の文体はかゝる書にこそ顯はれたれ。

胡蝶の夢の中に、百年の樂みを貪り、蝸牛の角の上に、二國の諍ひを論ず。よーと謂ひあーと云ひ、唯かりそめの事ぞか。とに付けかくに付けて、ひとつ心をなやますこそおろかなれ。應仁の始め、世の亂れより此の方、花の都の故郷をば、あらぬ空の月日の、ゆきめぐる思ひをなく、ならの葉の名におふ宿りにしても、六かへの春秋を送り迎へつゝ、うきふー繁き吳竹のはしになりぬる身を愁へ、こひぢにおふるあやめ草の、ねをのみ添ふる比にもなりぬれば、山の東美濃の國に、武藏野の草のゆかりを、かこつべきゆゑあるのみならず、高砂の松の、知る人なきにしもあらざれば、さみだれ髪のかきくもらぬさきにと、みのいろ衣思ひ立つ事ありけり。此の月は、よろづに思むなる物をと、云ふ人ありけれど、人の事はいらす。我が身にとりては、此の七日に生まれれば、却り

てよき月と思ひ侍る物を。と有りーかほ、聞く人ことわりとや思ひけん。さる程に、二日の明け方に、奈良の京を立ちて、般若寺坂を越え、梅谷なごひひて、人離れ心すごき所々を歴て、かものわたりを過ぎ、三日の原といふ所に、輿をとめて思ひつゝけ侍り。
かぞふれば、あすはさ月のみかの原、

けふまづ奈良のみやこ出でつゝ。

泉川を舟にて渡る。

わたる舟、棹さすみちに泉川、

今日より旅の、ころもかせ山。

これよりして、新關どもを世の亂れに事よせて、思ふさまにたておきつゝ、旅行の障りと成りにけり。仁木など云へる領主の方々をこゝらへて、事ゆゑなくは通り侍れど、心くるーき事のみあり

けり。

さもこそは、うき世の旅に、さすらはめ、

道さまたげの、せきなどゝめそ。

伊賀國あさ宮といふ所に至りぬれば、日もやうく暮れ方になり、雨をほふりて、前路もどけがたく、行きかゝりて宿りもなく、中々あゝかりぬべしと、人々申し侍れば、其のあたりに、小家のあるをかりて、一夜を明かす侍りぬ。

行きくれて、雨はふりきぬ。朝宮を、

あさ立つまでの、宿やからまゝ。

三日朝宮を立ちて、野尻とひかは、くらほねなど聞きもならはぬ、木どり草かりならでは、通はぬ所々を過ぎて、道の行くてに石山寺に詣て、大悲者を禮し奉る。

さわぎ立つ世にも動かぬ石山は、

げにあひがたき誓ひなりけり。

濱の關とかやは、青蓮院の座主に申して、通り侍りぬ。松本を過ぎ、大津に至りて、過ぎこゝ方を返り見て、俳諧の躰を思ひつゝ、侍り。

くらほねは、早く過ぎてき、荷かけ駄を、

おほつの里に、いぼしやすまん。

十六日竹の内の僧正の、あくたみの莊を一見すべき由しめす。よて江口より舟にのりて、二里ばかり川づたひにさかのぼる。因幡山の麓を過ぐる路なり。此の山は、奥州より金の化束せる由、因幡社の縁起にありとかや。

岸におほる、松とはしるや、いなほ山、

こがね花咲く、御代のさかえき。
さなへどる、麓の小田にいそぐなり、

そよぐいなほのみねの秋かぜ。

けふは小雨そよぎて、風いさゝか吹く。日入りてかゝりに到る。船
の中の窮屈に堪へず。すなはち偃臥す。前後を知らず。天明に及す。
あくる日僧正申しけるは、昨日は涯分奔走いたし、谷の底まで掘
り索めし。かひもなく、遂におどろか。とありし。かば、睡眠のきざ
しに、やがて枕を傾けし。心よさは、邯鄲遊仙の樂みも、かくこそ
とおほえしなり。それによまさる程のもてなしは、心にくしもおほ
えぬとて、笑ひ侍りき。

◎序跋文

書籍の序跋、および和歌の序詞ども、當時代にかゝれしもの數十篇の多きに及
べど、こゝには唯僅に、兩三篇を掲ぐるに止めつ。さるは此の類の文章は、前代に
於ける古今の序、もしは大堰川行幸和歌序、庚申夜歌合序などの体裁に倣ふを
例とせり。されば云ふ迄もなく、擬古体なり。然れども、足利時代の文に至りては、
やうく漢文体の口氣を交へ、いたづらに詞を飾りて、却りて陋劣になれり。左
に掲ぐる文どもを見て、文体の變ぜしさまを知るべし。

(一)新勅撰和歌集序

後堀河天皇の貞永元年、綸言を下して、定家中納言に撰集せしめられしにより、
此の序を添へて、四條天皇の天福二年に進奏せられしなり。
定家卿は、俊成卿の子にして、當代の名匠たりし事、誰れも知る所なれば云はず。
この文さしも名匠の筆ながら、自己の議論とては、なく、紀氏の序文の形式に則
りて精神をうつされず、氣骨文章ども、遙に劣れるを見る。

すべらざのみこと、のりをうけ給はりて、吾が國のやまと歌をえ

らぶ事、みづがきの久しき昔より始まりて、すがのねの長き代々につたはれり。いはゆる古今後撰、ふたつの集のみにあらず。おほやけごとなずらへて、あつめしるされたるためし、むかしといひ、いまといひ、其の名多く聞てゆれど、九重の雲の上にめされて、久方の月にまじはれるともがら、この事うけたまはりおこなへるあとはなほ稀なり。白河のかしこき御代、ことわざしげきまつりごとのぞませたまひて、七十あまりの御よはひたもたせたまひしはじめ、後拾遺をえらべる、ひとたびなんありける。然るに吾が君天の下しめしめてよりこのかた、十年餘りの春秋、四方の海立つしきなみも聲しづかに、七のみち、民の草葉もなひきよろこべり。かりごもの亂れしを治め、秋草のおとろへしを興させたまひき。秋津洲また更に賑はひ、天つ日嗣ふたしびさかりなり。

たゞ延喜天曆の昔時すなほに、民ゆたかに喜べりし政事をしたまふのみにあらず、又寛喜貞永の今世治り人やすく、樂しき言の葉をしらしめんために、ことさらに集めえらばるしならし。定家濱松のどしつもあり、河竹のよしに仕うまつりて、七そぢのよはひにすぎ、ふたしなのくらゐを極めて、下の言をきよて上に納れ、かみの事をうけ給はりて、下へのぶるつかさを、たまはれる時にあひて、たらちねの跡を傳へ、ふるき歌の遺りをひろふべき、仰せ事をたまはるによりて、春夏秋冬、折ふしの言の葉をはじめて、君の御世をいはひたてまつり、人の國を治め行ひ、神をうやまひ佛に祈り、おのがつまをこひ、身のおもひをのぶるにいたるまで、部をわかち巻を定めて、濱のまさごのかずしに、浦のたまもかきあつむるよし、貞永元年十月二日、これを奏す。名づけて新勅撰和歌

集とすといふところかり。

(二)都の苞の跋

此の文は、南北朝時代の初め、二條攝政良基公の書き給へるなり。公も新後拾遺和歌集といへる勅撰の歌集の序を書き給へる。頗る上文の体に似たれど、それは舊例を倣はるゝよりおのづと然るなれば、今わざと彼れを舍きて、此の跋文を取れり。此の文も猶古きを摸されしなれど、さすが上文などは、其の体を異にし、多く對句を構へて、文の飾りとせり。

良基公は、南北朝時代に、又なき文學者におはしけり。試に扶桑拾葉集を抜き見よ。十四の卷上下二冊は、悉く此の公著述の文のみなり。さるに、近日多く出来し、文學史類の中にも、此の公のさは、寂として音なし。いとくち惜しきわざなれば、公の御履歴を略記すべし。

公は藤原師輔公の後裔にして、家を二條と稱せらる。攝關の家がらなり。後醍醐天皇の御宇、嘉暦二年元服して、正五位下に叙せられ、權中納言に累遷せり。後醍

醐帝、西海に遷幸ましく、後、都には持明院派の光嚴天皇立たせ給へり。仍りて此の公、前任のまゝ、仕へ參らせしうち、後醍醐天皇御歸洛あり。再び御位に復させられて、建武と改元あり。その二年、公は權大納言に轉じ給へり。かくて後醍醐天皇、再び南山に遷幸ましく、し時には、公従ひ奉らず。但し殊なる仔細あるにあらず。此の時、公の歳いまだ廿五にも満たず。名族におはせば、官位こそ、若きに昇進もせられけり。後醍醐帝、王政の復古を覺し、召し立たれし初めには、いまだ甘才にだに満たぬ程なれば、關東討滅の謀議には、此の公更に預かり給はざりけらし。かゝる事情により、強ひて吉野の皇居にも參らず。且は前に一たび、光嚴院の朝に出仕せられし縁もあれば、猶都に止まりて、北朝に仕へ、遂に光明、崇光、後光嚴、後圓融の四天皇に、歴事したりしが、此の間に、内大臣より、左右大臣をも經て、關白、氏長者となり、太政大臣從一位に至り、又三宮に准ぜられ、攝政ともなりて、元中五年南北朝後龜山天皇の御世なり、御歳六十九にて薨せられぬ。傳に云はく、公博覽にして、文才あり。家もと舊記多きに、諸家の秘録をも借寫して、悉く文庫に藏められき。故に朝廷の儀式、武家の禮法、人皆其の家に就いて質

す者多かりきとぞ。公みづから記せるものにも、人臣の君に仕ふる事皆塵につきて其の所業を嗜むなり。我が家には、まづ政道、次に和漢の才學なり。其の外餘力あれば、是れをたしなむ。余管をうかひ、埴をおもてにする分際にて、何事か申し侍るべき。但し本朝の諸傳を窺へると、既に一萬卷に餘れり。是れ世の知る所なり。後醍醐、院光嚴、院わかよりとりわけ御恵みに預かりしは、物を能く覺え、ためりと寂感にてありしにや。當職の間、君を輔佐したてまつると、他人をまじへずして、既に四五代、又三代將軍の芳約、人に超えたりしかば、今も人なみに世にさすらひ侍るばかり也。我が家事をばさしかきて、年比より、いたづらごとを稽古し侍る事多し。詩歌の道、その身は初心なれども、眼にとゞめ耳に入る事おほし。云々といへり。

公また和歌を好み、近世和歌の風体、古調を失へるを慨き給ひ、頼阿法師と歌道の奥儀を論じ、記録して一書とし、愚問賢註と名づけて、後世の模範としたまひ、又連歌に關する事を述べて、筑葉問答と名づけ、古來の連歌の秀逸を集め、菟玖波集二十卷を撰みたまへり（連歌の條參看すべし）

かゝれば此の公、文學の才におきては、南朝の北畠親房准后にも、匹敵すべき御方なるに、北朝に出仕せられし故にか、近世學者間に稱せられず。著述もあまり世に出でず。隨ひて世にある文學史などにも、唯連歌のさたに就いて、僅に其の名を記すに止まるは、いとあかず口惜しき事になむ。今や史學文學隆運にむかひ、古きを温ね、昔を語るすさび盛に行はれ、近世俳諧狂歌に巧みなる者だに、なほ世に傳へらるゝ中に、此の公の事の知られぬが、遺憾に堪へず、いさゝか贅辯を費すのみ。

僧宗久といふ人あり。心を一枝の花にそめ、思ひを八雲の風にかけて、蓬の跡定る所なく、浮艸の露さをふ、水にまかせてなん、まどひありきける。みよゝ野の花の春は、山のあなたを隠れ家と頼み、武藏野の月の秋は、草のゆかりを宿りにて、あかゝ暮らゝ侍れば、六十餘州の抖擻残る處なく、三十一字の風情尋ねぬ方もなかりけり。いにしへ賢かりゝ人も、或は竹を愛することを、世と共の癖

と、あるは詩をこのむことを、身に添ふやまひとなんけり。この人もかくの如くなるべし。墨染の袖のうちには、どこいなへにちひさき硯を放たず。むづかき杖のほとりには、又短かき筆をとりそへ侍りける。剡溪の曉の雪をのぞませれども、すきの友をたづねては、そこはかどなくあくがれ。盧山の夜の雨を聞かざれども、沈吟の腸を碎きて、志を述べずといふ事なし。觀應のころにや。大江山いくの道に分け過ぎ侍りけるより、陸奥鹽竈の波に浮ぶまで、名ある野山の末には、思ひの露を残し置き、情おほき草木の蔭には、言の葉をかきあつめて、あねはの松にはあらねど、都のつとよ名づけ侍りぬ。誠に愚なる弄ひに似たりといへども、なごか心を傳ふる教へども、なり侍らざらん。忽に嗟嘆の志に堪はず。いさゝか荒蕪の辭を添へ侍るばかりなり。

(三)詠月和歌序

此の文は、足利時代の末(後柏原帝の永正の頃より後奈良院の享祿天文迄)歌仙の随一人と呼ばれ、有識と稱せられし、西三條内府實隆公の作なり。されば、其基公よりは百餘年の後、兼良公よりは凡五十年程後にあたる。應仁の亂後、海内衰弊、文學極微の頃なれば、さしも名高き文者の筆とは見えぬまでになり下れり。文章の年を逐うて衰へ來しさま、想ひ知るべし。

實隆公は、三條家の支流なり。文明元年元服して、左近衛少將に任ぜられ、段々昇進して、永正三年に内大臣に至れり。後致仕して、剃髮し、それより諸國に遊びて、名勝を探り、歌よみ文かきて、世を過ごされたり。其の歌風は、一に古調に依れり。家の集を雪玉といふ。又詩をも作られたり。當時書籍の乏しき頃とて、公みづから、史記全部を手寫せられし事ありきといふ。學事に精勵せられし程、これにも想ふべし。誠や此の公、源氏物語の難義を註解せられし書を、細流抄とて、後世學者の重寶となれり。公は天文六年の十月、御歳八十三にて薨せられぬ。遙道院

と稱す。

因に記す。公の子公條公、右大臣までなり昇れり。父君の業を繼ぎ、學和漢に兼通せり。但し漢學は父に過ぎ、和學は及ばずと申す。曾て細流抄を校し、聊増減する所あり。更に明星抄と名づけて、世に行はる。公は正親町天皇の永祿六年に薨せり。御年七十七、稱名院と稱す。

公條公の息を實枝と申す。是れはた父祖の業を承けて、和歌を能くす。三光院内府と稱す。此の公の時、足利將軍政柄を失ひ、織田氏政權を握れり。そもくこの西三條家は、三條の庶流たりしか。父子三世文學を以て聞こえ、而も大臣の榮官を荷ひし、珍らしき事なり。是れより後は、學者文人といはるゝもの。公家衆中に、索むべからざるに至りぬ。

日本もろこし月を翫ぶこと、大むね四時にすべて、ねんどろなる中に就いて、三秋をすぐれたりとす。殊に、その名を得たるは、是れ葉月の、中の五日に過ぎざるべし。然れども、宿霧常に望を隔てし、

狂雲やよもすれば影を妬む。いにしへより今に至れる恨みなり。あらかじめ明夜の陰晴知り難きがため、金樽に竹の葉新なる風を賞し、素琴に菅の根の長き夜を惜しむは、けだし十四夜の事ならし。誠に今宵の清光、已に明日の佳名を奪へり。ひとり感悦の思ひに堪へず、残りの灯を螢壁の底にそむけ、短き筆を兎輪のもとにはいらしめて、たましく十五首の和歌をつくれり。いはゆる淺香山の深き淺きを沈み吟じ、難波津のあしよしを思ひめぐらせ、るにもあらず。唯、時に當れる思ひをのべ、こよろさしの之く所にまかするのみ也。といふことしかり。

◎草子文

當時代の草子文は、僅に徒然草の一書あるのみなれば、唯その文を載するに止めつ。鎌倉大草子、宗吾大草子などは、草子の名こそあれ、一は足利時代に於ける、一種の歴史的文章にして、一は諸禮儀式を書けるものなれば、前時代の枕草子、この徒然草などには、似も付かぬもの也。

徒然草

徒然草は、今より五百八十年ばかりの昔、南北朝の時代に、兼好といへる法師のかける由、誰れも知る所なり、さても本書は、一時に書き綴りしものならず、見し事聞きし事、心に感ぜし事どもを、其の折々に記したるなれば、始めより終りまで、連絡一貫せず、され、の文長短すべて二百四十餘篇には過ぎず。或説には、兼好歿後に、其の草庵の壁に貼られし反故と、召仕ひし童の形見にもたりし草稿など、を収集めて、一書に編じ、卷首に置きたる文章の冒頭に、つれづれなるまゝに、とある詞をとりて、徒然草と名づけし也ともいふ。

扱この文中に書ける趣旨は、大かた佛説に基づき、老莊の言、孔子の教をも參し、己れ一種の見識を以て取捨判断し、尙世上の雜事をも評騰せしものにて、理義

深精に高尙なれど、中には往々奇僻に流れ、人情に悖れる所なきにあらざり。又論旨に、自家撞着の條も見ゆめれど、これは出世間の兼好として、道を論ずると、世間の兼好として、普通の人情を汲みての論とによりて、しか異なるぞと見るべし。此の外景を叙し情を述したる文に、優美なるあり、滑稽の状を記せるに、輕妙なるあり、飄逸なるも、ありて、凡ては枕草子の文体を摸擬したるものぞかばし。兼好は名高き文人なれば、其の履歴を概略いはんに、兼好の先は、大織冠鎌足公に出で、祖父卜部、宿禰兼名は、從四位下右京大夫たりき。其の長子兼顯に、三子あり、長は早く入道して、慈遍と稱し、南方の宮に伺候して、大僧正たり。次子兼雄は、從五位上、民部大輔に昇り、季子は即ち兼好なり。始め吉田と云ふ所に住みて、吉田兼好と稱せり。壯年の時より、伏見院後伏見院の間に仕官して、瀧口となり、後二條花園兩院にも歴仕し、又後宇多院の仙洞におはしますに、北面として、も參り、厚き恩寵を蒙りしに、後院崩御ありければ、主從の縁みを思ひ、且は人生の無常を觀じて出家し、兼好の名をその儘、音讀にどなへて、法名と定めしなり。それより諸國を巡歴し、こゝかしこに移り住みて、諷詠に心をやり、且は勸行怠

る事なかりけり。元來兼好は佛學漢籍に通達せしが、和歌固より堪能にして、摺紳家の人々とも、交遊常に絶えざりき。晩年伊賀の國守橘成忠が招きによりて、彼の地に赴き、國見山の麓、田井の庄に假りの庵を營みてありしが、正平四年北朝の崇光天皇二月、病みて身まかりぬ。享年六十九なりき。兼好臨終の際、北朝の崇光天皇、典藥和氣清光を遣はされて、診療せしめ給はんとありしに、世を捨てし身のいつまでか生を食らひとて、聽かざれば、此の由都へ申し、二條良基公、みづから伊賀に下られて、病床を訪らひ給ひ、名残を惜しむついでに、かしくき旨をも傳へたりとす。帝その地に、墓を營ましめ、權僧都を贈らせ給ひぬ。

長命を望みて何かせん

あだ一野の露消ゆる事なく、鳥部山の煙り立ちさらで、住みはつるならひならば、いかに物のあはれもなからむ。世は定めなきこそいみじけれ。命あるものを見るに、人ばかり久しきはなく。かげろふの夕ユラキを待ち、夏の蟬の、春秋を知らぬもあるぞか。つくづく

と、ひとし世をくらす程だにも、こよなうのさけいや。飽かず惜しと思は、千とせを過すとも、一夜の夢の心ちこそせめ。住みはてぬ世に、見にくき姿をまちえて、何かはせん。命長ければ耻多し。長くとも、四十に足らぬ程にて、死なんこそ目やすかるべけれ。其の程過ぎぬれば、形を耻づる心もなく、人にて交らはんとを思ひ、夕の日に子孫を愛して、さかゆく末を見んまでの命をあらまひたすら、世をむさぼる心のみ深く、物のあはれも知らずなり行くなん、あさましき。

いやしげなるもの

居たるあたりに調度の多き、硯に筆の多き、持佛堂に佛のおほき、前栽に石草木のおほき、家の内に子孫の多き、人にあひて詞のおほき、願文に、作善おほくかきのせたる、多くて見苦しからぬは、文

車のふみ塵塚のちり、

人生期する所老と死とにあり

蟻のごとくにあつまりて、東西にいそぎ、南北に走る。高きあり、いやしきあり。老いたるあり。わかきあり。行く所あり、歸る家あり。夕にいねて、朝におく。いとなむ所、なにごとぞや。生をむさほり、利をもとめて、やむ時なく。身をやくなひて、何事をかまつ。期する所、たゞ老と死とにあり。そのきたる事、すみやかにして、念々の間にとゞまらず。これを待つ間、なにのたのしみかあらん。まどへる者は、これをおそれず。名利におほれて、先途の近きとを、かへりみねばなり。おろかなる人は、また是をかなしむ。常住ならん事を思ひて、變化の理をいらねばなり。

無益のいとなみ

無益の事をなして、時をうつすを、愚なる人とも、ひがことする人ともいふべし。國のため、君のため、止む事を得ずして、なすべき事多し。其のあまりのいとまいくばくならず思ふべし。人の身に、止む事を得ずして營む所、第一に食物、第二に著る物、第三に居所なり。人間の大事、此の三つにはすぎず。飢ゑず寒からず、風雨に侵されずして、静に過すを樂しみとす。但し、人皆病ひあり。病ひにをかされぬれば、其の憂へ忍びがたし。醫療を忘る可らず。薬を加へて四つの事、求め得ざるを、貧しとす。此の四つかけざるを、富めりとす。この四つの外を、求めいとなむを、驕りとす。四つの事、儉約ならば、誰れの人か、足らずとせん。

家にあらまほしき木草

家にありたき木は、松、櫻、松は五葉もよし。花はひとへなるよし。八

重櫻は奈良の都にのみありけるを、此の頃ぞ世におほくなり侍
るなる。吉野の花、左近のさくら、皆ひとへにてこそあれ。八重櫻は
ことやうのものなり。いとこぢたくねぢけたり。植ゑずともあり
なん。遅櫻またすさまじ。虫のつきたるもむづか。梅は白き、うす
紅梅、ひとへなるが、とく咲きたるも、重りたる紅梅の、ほひめで
たきも皆をか。おそき梅は、櫻にさきあひて、おほえ劣り、けおさ
れて、枝にほみつきたる心う。ひとへなるが、まづさきて、ちり
たる心とくをか。とて、京極、入道中納言は、なほ、ひとへ梅をなん、
軒近くうゑられたりける。京極の屋の南むきに、今も二本侍るめ
り。柳またおか。卯月ばかりの若かへで、すべて萬の花紅葉にも
まさりて、めでたきものなり。橘、桂、いづれも、木は物ふり、大きな
よ、草は山吹、藤、かきつばた、なで、こ、池には蓮、秋の草は、萩、す

き、きちかう、萩、おみなべ、ふちぼがま、いきに、われもかう、苳萱、り
んだう、菊、黄菊も、つた、葛、朝顔、いづれも、いと高からず、さ、よ、やかな
る垣に、いげからぬよ。この外、世にまれなるもの、からめきたる
名のき、いにく、花も見なれぬなど、いとなつか、いからず、大かた、
何もめづらく、ありがたきものは、よからぬ人の、もて興ずるも
のなり。さやうのものなくてありなん。

いかゞして人をめぐむべき

心な、いと見ゆるものも、よき一言はいふものなり。あるあらえひ
すの、恐ろ、いげなるが、かたへにあひて、御子はおはすやと問ひ
に、ひとりも、もち侍らず。と答へ、いかに、おは、さては、物のあはれは、知り
たまは、い、情なき御心に、ぞもの、いたまふらんと、いとおそろ、子
ゆゑに、こそ、よろづのあはれは、思ひ、いるなれと、いひたり、さ

するす
は如身
夫なく
なり

ありぬべきとなり。恩愛の道ならでは、かゝるものゝ心に慈悲ありなんや。孝養の心なきものも、子をもちてこそ親の志は、おもひゝるなれ。世をすてたる人の、よろづに、するすみなるが、なべて、ほだゝおほかるひとの、よろづに、へつらひ、望みふかきを見て、むげにおもひくたすは、ひがことなり。其人の心になりて思へば、誠にかなゝからん。親のため、妻子のためには、恥をもわすれ、ぬすみも、いつべきことなり。されば、盗人をいまゝめ、ひがことをのみ、つみせんよりは、世の人の、飢ゑず寒からぬやうに、世をば、おこなはまほゝきなり。人恒の産なき時は、恒の心なく。人、きはまりて、ぬすみず。世治まらずして、凍餒のくるゝみあらば、どがの者、たゆべからず。人をくるゝめ、法を犯さゝめて、それをつみなはん事、不便のわざなり。さていかゞして、人をめぐむべきとならば、上のおごりつ

ひやす所をやめ、民をなで、農をすゝめば、下に利あらんと、うたがひあるべからず。衣食、よのつねなるうへに、ひがことせん人をぞ、まことの盗人とは、いふべき。

妄りに人の許に行くべからず

さゝたる事なくて、人のがりゆくは、よからぬことなり。用ありて、行きたりとも、其の事は、てなば、どくかへるべし。久しくわたる、いとむつかし。人とむかひたれば、ことば多く、みもくたひれ、心も静ならず。萬のこと、さはりて、時をうつす。たがひのため、益なく。いとほしげに、いはんもわろし。心づきなきこと、あらん折は、中々、其の由をもいひてん。おなじ心に、むかはまほしく、思はん人の、つれづれに、いまゝぼし、けふは心づかに、など、いはんは、このかぎりには、あらざるべし。阮籍が、青き眼、誰れもあるべきことなり。其の事

となきに、人の來りて、のどかに物語して、歸りぬるいとよ、又文も、久しく聞えさせねば、などばかりいひおこせたる、いとうれし、
萬事憑みかたし

萬の事は、たのむべからず。おろかなる人は、深く、ものをたのむゆゑに、うらみ怒るとあり。いきほひありとて、たのむべからず。こはきものまづ亡ぶ。財多しとて、たのむべからず。時のまに失ひやすし。才ありとて、たのむべからず。孔子も時にあはず。徳ありとて、たのむべからず。顔回も不幸なりき。君の寵をも頼むべからず。誅をうくる事すみやかに、奴いたがへりとて、たのむべからず。そむき走る事あり。人の志をも、頼むべからず。必變ず。約をもたのむべからず。信あるすくなく。身をも人をもたのまされば、是なる時はよろこび、非なるときは恨みず。左右ひろければ、さはらず。前後と

ほければ、ふさがらず。せほき時は、ひいげたく。心を用ふる事。すこしきにして、きびしき時は、物にさかひ、あらそひてやぶる。ゆるくしてやはらかなる時は、一毛も損せず。人は天地の靈なり。天地はかざる所なし。人の性、なんぞことならん。寛大にして、きはまらざる時は、喜怒、是れにさはらずして、物のためにならば、

居所のさま住む人の心に似ず

神無月のころ、くるす野といふ所を過ぎて、ある山里にたづねいる事ありしに、はるかなる苔のほそ道を、ふみ分けて、心ほそく住みなしたる庵あり。木葉にうづもるよ、かけひの葉ならでは、露おとなふものなし。あか棚に、菊もみちなど、折りちらしたる、さすがに、すむ人のあればなるべし。かくてもあられるよと、あはれにみるほどに、かなたの庭に、おほきなる柑子の木の枝もたわよに、

なりたるがまはりききびくかこひたりこそ、少くことさめて、此の木なからまゝかば、とおほえしか。

近古の歌

當時代は文章に普通体と擬古体との別ありし如く、歌にも此の時勢に應じて出来たる普通体と、又ひたすら古体の模型に據れるものとの二様ありき。時勢に應じて出来しものは、謡曲の詞を云ふ蓋し、謡曲を、歌の部類中に入れんとは、世間に異論もあるべきなれど、謡曲は總体の上より觀れば、一種の傳奇演劇なれども、其の詞は、皆諷謔に堪ふべく、七五の調べに、うるはしく作りたる物にして、云は、今様歌の一變して長くなり、其の間に問答の詞の入りたる迄なり。その問答とても、なほ節奏の調べを離れずして、普通の散文とは、全く語勢を異にするをや、仍て爰に、之を、歌の部類に收めつるなり。擬古体の歌は、當時全く、指紳家の玩具とこそなりはてたれ、さるは源頼朝將軍、

政柄を握りしより、さらぬだに軍事民政を顧みざりし大宮人は、いよ／＼ます／＼暇あれや、詞花言葉を弄び、朗詠管絃に日を暮らしければ、歌道は一時隆盛の域に至り、たとひ延喜の華實兩全の体にはあらずとも、一種の新機軸を出すまでに發達せり。當時期の初め、後鳥羽土御門順徳の三帝を始め奉り、良經關白も歌人なれば、百首歌合の公會も、日々所々に催されしかば、隨うて俊成定家家隆雅經有宗具親西行慈圓寂蓮長明など、上手の名を得たる人々輩出せり。中にも定家と其の子爲家とは、殊なる名匠にて、歌學は遂に彼の家の專業の様に、なりにける。

小中村博士の歌道沿革志に、爲家は一世の倚望殊に重き宿老なりしかば、終に此の道の泰斗となりて、可否得失を論せず、一に其の指揮に従ふ事となり、恰も世尊寺の筆道に於て、其の家を立てたる如く、歌道を以て家の業となしたるは、實に此の卿を始めとす。然れども此の卿の歌は、概ね持法に汲々として、専ら縁語を以て修飾し、上下のかけ合ひを取るを主とせしかば、雄偉麗麗なる、新古今の体一變し、遂に其の風地を拂ふに至れり。爲家三子あり、長子爲氏を御子左又

二條家とも二子爲教を毘沙門堂三子爲相を冷泉と各家を分ちたれば歌休も随ひて異なる中に、毘沙門堂流なる爲兼は一時の名匠にて勢威ある歌人なりしかば、二條家の流の平坦著實なるを嫌ひ、専ら俊成定家の風を心とせしかば、少しく氣概あるに似たれど、到底一種の奇僻を免かれず、玉葉風雅の二集の如き、即ち其の撰なるを以て、かのづから勅撰集の中、一種異体の風あり、因りては二條流なる爲氏爲世の徒、數種の書を著して、毘沙門堂流にて詠ぶ詞を云々とは詠ず可らず、云々とは庶幾すべからず、と言を定家爲家に托して、其の説を異にせり、爾後毘沙門堂の流は家絶えたれば、世人たゞ二條家の説を以て、醇然たる歌學とするが故に、冷泉家は二條家と大同小異あるのみ、禁制にのみ拘りて、磊落跌宕の風なく、歌は型の如く持法に詠むべき者ずと、尋常一様の人と思ひて、近世に至れり、然れども二條冷泉の世々に宗匠とある人は更なり、長明頼阿兼好、飛鳥井榮雅、東常縁以下名人と呼べる、人はかくの如き規矩の中に逍遙して、難なく詠み出でたるは、又勤めたりと云ふべし、云々是れにて當代歌學の有様、大やう見つべし。

かくて勅撰は、大かた御代毎にありて、之を承る者爲家の子孫ならぬはあらざりき、足利時代に至り、後花園天皇の時、新續古今集なりし後は、勅撰の舉全く廢れ、公家の式微と共に、斯道もいたく衰へにき、抑古今集の勅撰ありてより、新古今集までを八代集と云ひ、其の次に出來し、新勅撰集以下の十二集に併せて、廿一代集と云ふ、新古今より以下、皆當時代に成りし集なれど、こゝには唯新古今集の歌のみを掲げて止むべし。

連歌は前時代にもありし事既に云へり、當時代に至り、いよゝゝ流行せり、是れ連歌は和歌の如く拘忌なく、俗語鄙言をも擇ばねば、何人も入り易ければなるべし、足利時代の始め、菟玖波集と云ふ連歌の集なりて、勅撰に准ぜられ、其の後連歌に関する法式なども起り、宗祇宗長などの名人出で、其の門人には、連歌を專業とする者さへありて、遂に俳諧發句の源を開きぬ。

◎ 謠曲詞

謠曲の詞は、足利時代の文學として、異彩を耀かし、一奇概を呈したるもの也。

抑、謠曲には、神事能、祝言能、幽靈能、現在もの、四大別ありて、神事能の如きは、鎌倉時代既に其の基を起せりといふ。そは昔、諸社の神樂を張行せし後に、散樂サシガクをもして、興に入りし風を傳へしものにて、是れより祝言能は出來しなり。扱幽靈能と、現在ものに至りては、支那の傳奇雜劇より來りしなれど、猶之を猿樂と稱し、元の猿樂の、をこなる態をば、狂言と呼びならへり。

謠曲は猿樂田樂に基を起し、三代將軍義滿の比より、支那の雜劇を傳へて、今日の發達をなしたる也。其の事は、新井白石先生の俳優考に「鎌倉の世の末、室町殿の代の始めに當りて、傳奇雜劇などいふと、元朝に盛に行はれき。其の代には、我が國の人も、彼の國へ行き、彼の國の人も我が國に來り、彼れこれ行きかよひしかば、彼の國にするなる雜劇を、我が國の人の、見もし聞きも傳へしを、田樂猿樂を業とせる輩、やがて彼の國の傳奇など云ふとに倣ひて、古にありし事の、悦ぶべく恐るべく、樂むべく驚くべきとなどを、歌ひもの、詞に作りなして、歌ひ舞ひける也。これ彼の雜樂散更の餘風にて、其の事は又一變して、元朝の傳奇雜劇の体に倣ひしもの也。」とある如く、其の詞こそ國語なれ、趣構脚色は、全く彼れに

倣ひしものにて、今も世にある。彼の國の戲曲院本を見ても知らるゝなり。

扱謠曲は、清次元清の作とあれど、そは節譜舞容を定めしものにして、詞藻は別に作者あるべし。まづ江口山姥は、一休法師の作と云ひ、源氏供養は河上神主、高砂兼平は釋正徹、卒塔婆小町は賢性院宥快の作なりとの説もあり。此の外、大かた釋氏の手に成れ、ばにや、佛教の趣味は、殆ど謠曲の全体を蔽ふと謂ふべし。殊に幽靈能の如きは、何れも佛果に因りて、精靈の眞慧を禱ひ、迷魂を解脱せしむる趣きにて、千篇同作意なり。大和田氏の謠曲通解に、「文句の作者は、多く當時の文人歌人なりし事、疑ふ可らず。其の文人歌人といふも、過半は佛門の人か。さなくとも佛法の信徒たりしには、相違なければ、其の腦裏には、唯佛あるのみ。されば花も紅葉も、悉皆成佛の縁とながめ、風聲水音も、御法の響きと聞きなすのみ。かば、親子の愛を述べても、觀音の大慈悲を説き、英雄の末路を語りても、因果應報の理を説くを主とするは、自然の勢ひなり。其の上當時文學の權は、全く僧徒の手に歸しはてたりしかば、學問する者、皆これを師として怪まず。いはんや、殺伐を事とし、争鬭を業とせし亂世の餘風とて、武人は凡て粗暴殘酷なる様に

見ゆれど深更夢さめて静に思は、或は無益の殺生を悔ゆるもあるべく却りて反動の女々しき感情に制せられて佛門に歸依する例少からず能と謠ひとは之を慰めつゝ説法する事の上手なるもの也。とはいしくも云はれたり。かゝる事情によりてこそ當時の武人社會には盛に行はれしなりけれ。

總じて歌ひものは詞藻流麗なるものながら、謠曲の詞は特に流麗を極め、歌の詞と詩の字句と國語と漢語と又佛語と調和の尤も圓滑なるものなり。其の体を示さんため現在ものゝ詞一番を出すべし。現在ものは大かた人事に近づき、且世にあるべき喜怒哀樂の情を抒ぶるを主としたるものなり。

鉢木

ワキ大兼 行方さだめぬ道なれば。來方も何處ならま。問「是は一所不住の沙門にて候ふ。我此ほどは信濃の國に候ひしが。餘りに雪深くなり候ふほどに。まづ此度は鎌倉に上り。春になり修行に出てばやと思ひ候ふ。」道行信濃なる。淺間の嶽に立つ煙。遠近人の

袖寒く。吹くや嵐の大井山。捨つる身になき友の里。今ぞ浮世を離れ坂。墨の衣の碓氷川。下す筏の板鼻や。佐野の渡に著きにけり。
ワキ問 急ぎ候ふほどに。上野の國佐野のわたりに著きて候ふ。あらし止や又雪の降り來りて候ふ。此所に宿を借らばやと思ひ候ふ。いかに此屋の内へ案内申し候ふ。
ツレ問 誰にてわたり候ふぞ。
ワキ 是は修行者にて候ふ。一夜の宿を御かゝ候へ。
ツレ 安き御事にて候へども。主の御留守にて候ふほどに。御宿は叶ひ候ふまじ。
ワキ さらば御歸りまで是に待ち申さうするにて候ふ。
ツレ それはどうもかくもにて候ふ。妾は外面へ出でむかひ。此由を申さばやと思ひ候ふ。
ツレ あゝ降つたる雪かな。如何に世にある人の面白ふ候ふらん。それ雪は鵝毛に似て飛んで散亂し。人は鶴筆を著て立つて徘徊す

と云へり。されば今ふる雪も。もと見し雪にかはらねども。我は鶴
 籠を著て立つて徘徊すべき。袂も朽ちて袖せばき。細布衣陸奥の。
 今日希婦の寒さを如何にせん。あら面白からずの雪の日やな。あら思
 ひよらずや。此大雪に何とて是にたゞずみて御入り候ふぞツレとさ
 ん候ふ修行者の御入り候ふが。一夜の御宿と仰せ候ふほどに御
 留守の由申して候へば。御歸りまで御待ちあらうずるよ。仰せ
 候ふほどに。是まで参りて候ふ。ツレ扱その修行者はいづくに渡
 り候ふぞ。ツレあれに御入り候ふ。ツレ我等が事にて候ふ。いまだ
 日は高く候へども。餘りの大雪にて前後を案じて候ふほどに。一
 夜の宿を御かゝ候へ。ツレやすき御事にて候へども。あまりに見
 苦しく候ふほどに。御宿は叶ひ候ふまじ。ツレいやく見苦しき
 は苦しからぬ事にて候ふ。ひらに一夜を御かゝ候へ。ツレ留め申

いたくは候へども。我等夫婦さへ住みかねたる体にて候ふほど
 に。中々御宿は思ひもよらぬ事にて候ふ。是より十八町あなたに
 山本の里とてよき泊りの候ふ。日も暮れぬさきに一足もはやく
 御出で候へ。ツレ扱はかとおかあるまじいにて候ふか。ツレ
 御痛はくは存じ候へども。御宿は参らせがたう候ふ。ツレあら
 曲もなや。よくなき人を待ち申して候ふ物かな。

ツレあまよ。や我等かやうに衰ふるも。前世の戒行つたなき故な
 り。せめてはかやうの人に値遇申してこそ。後の世の便ともなる
 べけれ。然るべくは御宿を。参らせ給ひ候へ。ツレ聞さやうに思
 いめさば。何とて以前には承り候はぬぞ。いや此大雪に遠くは御
 出で候ふまじ。某おつゝきどめ申し候ふべし。のうく旅人御宿
 参らせうのう。餘りの大雪に申す事も聞えぬけに候ふ。痛はくは

御有様やなもと降る雪に道を忘れ。今ふる雪に行き方を失ひ。一所にたゞずみて袖なる雪を打ち拂ひうち拂ひ給ふ氣色。古歌の心に似たるぞや。駒どめて袖うちはらふ陰もなし。佐野の渡りの雪の夕暮。かやうによみは。大和路や。三輪が崎なる佐野の渡り。地是は東路の。佐野の渡りの雪の暮に。迷ひつかれ給はんより見苦しく候へど。一夜は泊り給へや。歌げに是も旅の宿。假初ながら。值遇の縁。一樹の陰のやどりも。此世ならぬ契なり。それは雨の木陰。是は雪の軒降舊りて。うきねながらの草枕。夢より霜や結ぶらん。

シテ詞いかに申し候ふ。お宿は申して候へども。何にても候へ参らせうずる物もなく候ふはいかに。ツレ詞折節これに粟の飯の候ふほどに。苦しからずば参らせられ候へ。シテさらば其由申し候

ふべし。いかに申し候ふ。御宿をば参らせて候へども。何にても参らせうずる物もなく候ふ。折節これよ粟の飯のあるよ。申し候ふ。苦しからずばきこし召され候へ。ワキ詞それこそ日本一の事にて候ふ。賜はり候へ。シテのうきこし召されうずると仰せ候ふ。急いで参らせられ候へ。ツレ心得申し候ふ。シテ總じて此粟と申す物は。古へ世にありし時は。歌に讀み詩に作りたるをこそ承りて候ふに。今は此粟を以つて身命を繼ぎ候ふ。げにや廬生が見し。榮花の夢は五十年。其邯鄲の假枕の假枕。一炊の夢のさめし。も。粟飯かしく程ぞか。あはれやげに我もうちも寐て。夢にも昔を見るならば。慰む事もあるべきに。のう御覽せよかほどまで。地住みうかれたる故郷の。松風さむき夜もすがら。寐られねば夢も見ず。何思ひ出の。あるべき。

シテ^{シテ} 夜の更くるについで次第に寒くなり候ふ。何をがな火に焚いてあて参らせ候ふべきや。思ひ出だしたる事の候ふ。鉢の木を持ちて候ふ。之を切り火に焚いてあて申し候ふべし。^{ワキ} 詞げに鉢の木の候ふよ。^{シテ} さん候ふ某世にありし時は。鉢の木の好き數多木を集めもちて候ひしを。かやうの体に罷りなり。いやく木ずきも無用と存じ。皆人に参らせて候ふさりながら。今も梅櫻松を持ちて候ふ。あの雪もちたる木にて候ふ。某が秘藏にて候へども。今夜のおもてなしに。之を火に焚きあて申さうずるにて候ふ。^{ワキ} いやく是は思ひもよらぬ事にて候ふ。御心さしはありがたう候へども。自然又た事世に出で給はん時の御慰みにて候ふ間。中々思ひもよらず候ふ。^{シテ} いやととも此身は埋木の。花咲く世に逢はん事。今此身にてはあひがたし。^{シテ} 唯いたづら

なる鉢の木を。御身の爲に焚くならば。^{シテ} 是ぞ誠に難行の法の薪と思し召せ。^{シテ} かも此程雪ふりて。^{シテ} 仙人に仕へし雪山の薪。^{シテ} かくころあらめ。^{シテ} 我も身を。^{シテ} 捨て人の爲めの鉢の木。切るとてもよしや。惜しからじと。雪うち拂ひて。見れば面白やいかにせん。先冬木より咲きそむる。窓の梅の北面は。雪封じて寒きにも。異木よりまづ先だてば。梅を切りや初むべき。見むといふ。人こそうけれ山里の。折りかけ垣の梅をだに。情なしと惜しみに。今更薪になすべしと。かねて思ひきや。櫻を見れば春ごどに。花すこし遅ければ。此木やわぶると。心をつくし育てしに。今は我のみわびて住む。家櫻きりくべて。緋櫻^火になすぞ悲しき。^{シテ} 扱松はさしもげに。^地 枝をため葉をすかして。かよりあれと植ゑ置きし。其かひ今は嵐吹く。松はもとより煙にて。薪となるもことわり

や。切りくべて今ぞ御垣守衛士の焚く火はお爲めなり。よくより
てあたり給へや。

ワキ詞 近頃よき火にあたり寒さを忘れて候ふ。シテ御出でにより
我等も火にあたりて候ふ。ワキいかに申し候ふ。主の御名字をば
何と申し候ふぞ承りたく候ふ。シテいや某は名字もなき者にて
候ふ。ワキ何と仰せ候ふとも。唯人とは見え給はず候ふ。自然の時
の爲にて候ふ。なにの苦う候ふべき。御名字を承り候ふべし。
シテ此上は何をかつゝみ候ふべき。是こそ佐野の源左衛門の尉常
世がなれる果てにて候ふ。ワキうれは何とてかやうの散々の体
にはなり給ひて候ふぞ。シテ其事にて候ふ。一族どもに押領せら
れてかやうの身となりて候ふ。ワキのううれは何とて鎌倉へ御
上り候ひて。其御沙汰は候はぬぞ。シテ運の盡くる所は。最明寺殿

さへ修行に御出で候ふ上は候ふ。かやうにおちぶれては候へど
も。御覽候へ是に武具一領長刀一えだ。又あれに馬を一疋つない
で持ちて候ふ。是は只今にてもあれ鎌倉に御大事あらば。ちぎれ
たりとも此具足取つて投げかけ。錆びたりとも長刀持ち。瘦せた
りともあの馬に乗り。一番に馳せ参り着到につき。さて合戦始ま
らば。地敵大勢ありとても。一番に破つて入り。思ふ敵とよりあひ
討ちあひて。死なん此身の。此まゝならほいたづらに。飢につかれ
て死なん命。なんほう無念の事さふぞ。

ロンキワキ「よーや身の。かくては果てし只頼め。我世の中にあらん
ほど。又こそ参り候はぬ。暇申していづるなり。シテッ」名残おし
の御事や。始めてつゝむ我宿の。さも見苦しく候へど。しぼしぼは留
まり給へや。ワキ留まる名残のまゝならば。扱いくたびか雪の日

の。二人空さへ寒き此暮に。ワキいづくに宿を狩衣。二人今日ばかり留まり給へや。ワキ名残は宿にとまれどもいとま申して。二人御出でか。ワキさらばよ常世。二人また御入り。地自然鎌倉に御上りあらばお尋ねあれけうがる法師なりかひくくはなけれども公方の縁になり申さん御沙汰捨てさせ給ふなどいひすて出船の共四に名残惜しむらん。

後シテいかにあれなる旅人鎌倉へ勢の上るといふは誠か何おひたしく上るさぞあるらん東八個國の大名小名思ひくくの鎌倉入りさぞ見事にて候ふらん白金物打つたる糸毛の具足に金銀を展べたる太刀かたな飼ひに飼うたる馬にのり乗替中間きらびやうにうちつれく上る中に常世が常に替はりたる馬武具や打物の物其ものにあらざる氣色さぞ笑ふらんさりながら。

所存は誰にも劣るまじと心ばかりはいさめども勇みかねたる瘦馬のあら道おうや。地急げども弱きに弱き柳の糸のシテよれによれたる瘦馬なれば。地うてどもあふれども先へは進まぬ足弱車の乗り力なければ追ひかけたり。

ワキいかに誰かある。ワキ御前に候ふ。ワキ國々の軍勢どもは皆々來りてあるか。ワキさん候ふ悉く参りて候ふ。ワキ其諸軍勢の中にいかにもちぎれたる具足を著さひたる長刀を持ち瘦せたる馬を自身ひかへたる武者一騎あるべし。急いで此方へ來れと申し候へ。ワキ畏つて候ふ。いかに誰かある。在御前に候ふ。ワキ君よりの御説には諸軍勢の中にちぎれたる具足を著さひたる長刀を持ち瘦せたる馬を自身ひかへたる武者有るべし。急いで尋ねて御前へ参れとの御事にて候ふ。在御畏つて候ふ。いかに申

候ふ。シテ何事にて候ふぞ。狂言いそいで御前へ御参り候へ。シテ
 「何と某に御前へ参れと候ふや。狂言中々の事。シテあら思ひよら
 ずや。定めて人たがへにて候ふべし。狂言いやく其方の事にて
 候ふ。其子細は諸軍勢の中にいかにも見苦き武者をつれて参
 れどの御事にて候ふが。見申せば其方ほど見苦き武者も候は
 ぬ程に。扱申し候ふ。急いで御参り候へ。シテ何とたどへば諸軍勢
 の中に。いかにも見苦き武者に参れと候ふや。狂言中々の事。シテ
 「扱は某が事にて候ふべし。畏つたると御申し候へ。狂言心得申し
 候ふ。

シテげにく是も心得たり。某が敵人謀叛人と申し上げ御前に召
 し出だされ頭を刎ねられん爲めなよしくそれも力ないいで
 く御前に参らんと。大床さして見渡せば。地今度の早打に上り

あつまる兵。きら星の如く並み居たり。さて御前には諸侍。其外數
 人並み居つし。目をひき指をさし。笑ひあへる其中に。シテ横縫の
 ちぎれたる。地ふる腹巻に鑄長刀。やうく横たへ。わるひれた
 る氣色もなく。参りて御前にかこまる。

シキ間やあいかにあれなるは佐野の源左衛門の尉常世か。是こそ
 いつぞやの大雪に宿かりし修行者よ見忘れてあるか。いで汝佐
 野にて申せしよな。今にてもあれ鎌倉に御大事あるならば。ちぎ
 れたりとも其具足取つて投げ懸け。鑄ひたりとも其長刀を持ち。
 瘦せたりともあの馬にのり。一番に馳せ参すべきよし申しつる。
 言葉の末を違へずして。参りたるころ神妙なれ。先々今度の勢づ
 かひ。全く餘の義にあらず。常世が言葉の末。眞か偽か知らん爲め
 なり。又當参の人々も。訴訟あらば申すべし。理非によつて其沙汰

いたすべき處なり。先々沙汰の始めには常世が本領佐野の庄三十餘郷かへし與ふる所なり。又何よりも切なりしは大雪ふつて寒かりしに秘藏せし鉢の木を切り火に焚きあてし志をばいつの世にかは忘るべき。いで其時の鉢の木は梅櫻松にてありしよな。其返報に加賀に梅田越中に櫻井上野に松井田合せて三箇の庄子々孫々に至るまで相違あらざる自筆の狀安堵に取り添へ給ひければシテ常世は之を賜はりて地常世は之を賜はりて三度頂戴仕りこれ見給へや人々よ始め笑ひしともがらも是ほどの御氣色さぞ羨ましかるらん。

地扱國々の諸軍勢皆御いとま賜はり古郷へとてぞ歸りける。シテ「其中に常世は地其中に常世はよろこびの眉を開きつゝ今ころいさめ此馬にうちのりて上野や佐野の舟橋とりはなれし本領

に安堵して歸るぞうれしかりける。

(二)新古今和歌集

此の集は土御門天皇の元久二年に後鳥羽上皇の院宣を以て彼の定家家隆を始め雅經有家源通具等の精撰せられし所にして上皇も此の道の好者にかはしければ親しく裁定し給へるもまゝありとす。小中村博士云はく此の集の歌は總べて一首の句調を麗はしく整ふるを本意とし詞の上に心を殘して餘韻を深く籠めあらはに淺き所なくしかもたけ高くして情致ふかく新奇自在なるは前にも後にも比類なき姿にして歌道の行はるゝや此の時を隆とす。橘守部が心の種といふ書に今世の人の耳に其趣向の氣の利きて聞こは思ひ付き云ひなしさまの小意氣に見えて自然と心に染み安く見はたるは新古今の頃の歌どもなり。とあるは實に然なり。されども村田春海の説に此の姿好める人は其の頃の人の優れたる歌あるを思ひもわかで只其世にひとふし詠み出

でたる手ぶりをのみ面白き事におもへるは違へり。そは上手のこまやかに取
りつくるひたる物なれば、一わたり打ち見て、にも云はずをかしきが如くなれ
ど、古の歌より見れば、心の誠少くして、詞艶なるに過ぎていやしげ也。新古今を
よまんには、主と此の差別を思ふべし。と歌語に載せたるは、初學の輩、その高致
をば學び得ずして、唯纖巧に流るゝを戒めたるものなり。と又二條攝政良基公
の、近來風体抄にも「新古今ほど面白き集はなし。初心の人にはわろし。心得たる
は、此の集を見んと、いかであしかるべき。」とも見えて、昔より、よくせずば纖巧に
流れ、輕薄に陥るべしと説くなれど、ともかくも、一機軸ある歌の出來し、此の頃
なるべく、見るもの聞くものにつけて、云ひ出だせる時代をさりて、歌は作るも
のと成れる。技術の點より云は、殆ど上乘に到りたるものなるべし。阿佛尼の
夜の鶴に「新古今昔のやさしき姿に立返りて、折らば落ちぬべき萩の露、ひろは
く消ゆるなどする。玉篠のあられなど申すべきを、餘りにたはれ過ぐして、歌の
あしざまになりぬべし」とて、新勅撰は、おもふ所ありて、誠ある歌をばらばれけ
り、などを承り候ひし。」とあれど、新勅撰いかでか、新古今に及ぶべき。承久亂の後

は、時世の勢ひに寄りてにか、定家家隆の歌だに、寂莫の口氣なりとは、小中村博
士も云へり。

春の初め歌

後 鳥羽院

ほのぐと、春こそ空に來にけら、天のかぐ山霞たなびく。

源 具親

難波がた、かすまぬ波も霞みけり、うつるもくもる、おほろ月夜に。

晚霞といふとを

後徳大寺左大臣實定

たごの海の霞のまよりながむれば、入日を洗ふ、おきつゝら波。

題しらす

西行法師

とめこか、梅さかりなるわが宿を、うときも人は、折にこそよれ。

梅花夜薫

藤原定家

梅の花にほひをうつす袖の上に、のきもる月の影ぞあらそふ。

五十首の歌奉りし時

藤原雅經

尋ね来て、花にくらせる木のまより、待つともなき、山のはの月。

山里にまかりて

能因法師

山さとの春の夕ぐれ来て見れば、入相の鐘に、花ぞちりける。

百首の歌奉りける時

二條院さぬき

山たかみ、峯のあらうにちる花の、月にあまざる、あけかたの空。

殘春の心を

攝政太政大臣良經

よゝの山、花のふる里あとたえて、空しき枝に、はる風ぞ吹く。

五十首奉りし時

寂蓮法師

くれて行く、春のみなどは知らねども、霞におつる、宇治の柴舟。

題しらす

さがみ

きかで唯、ねなまゝものをほとゝさす、中くなりや、夜はのこる。

藤原家隆

いかにせん、こぬ夜あまたのほとゝす、さまだと思へば、時雨のそら。

そのこども詩を作りて歌にあはせしに山路秋行
といふことを

大僧正慈圓

みやま路や、いつより秋の色ならむ、見ざりし雲の、ゆふぐれの空。

水無瀬にて十首歌奉りし時

左衛門督通光

武藏野や、ゆけども秋のはてぞなき、いかなる風の、末に吹くらむ。

題しらす

西行法師

心なき、身にもあはれは知られけり、鴨たつ澤の、秋の夕ぐれ。

山家雪といふことを

定家

まつ人の、ふもとの路はたえぬらむ、のきはの杉に、雪おもるなり。

湖上冬月

家隆

あがの浦や、遠さかり行く波まより、こぼりて出つる、有明のつき。

熊野に詣でし時奉りし歌の中に

藤原秀能

おく山の、木の葉のおつる秋風に、たえぐ峯の、月ぞのこれる。

羈中晚嵐といふとを

定家

いづくにか、今宵は宿をかり衣、ひも夕くれの、峯のあらうに。

鴨社の歌合とてよめりけるに月を

鴨長明

石川や、せみの小川の清ければ、月もなごりき、尋ねてぞすむ。

此の後の歌どもは、姿詞やうやく枯らび、而も持法に汲々たるさまにて、一ふしかはれる所もなければ、勅撰の集を始め、世に聞こゆる歌どもをも、凡て略さつ。誠や此の以後の歌人としては、藤原爲明、爲綱、實隆の諸卿、釋氏に頼阿、淨辨の徒、武家に常縁、持資、太田道灌の輩なり。なほあるべけれど、能くは知らず。

(二) 菟玖波集

菟玖波集は、後光嚴天皇文和五年(南朝後村上帝の御宇)二條攝政良基公の撰せられし連歌の集なり。菟玖波と名つけられし由は、昔日本武尊東夷御征伐の途次、常陸より上野を歴て、甲斐の酒折宮に至りまし、時にひばり筑波を過ぎて

幾夜か寝つる、と、過ぎ來し日敷を思ひはかりて、詞ひ給ひしに、傍に侍りし火焚の老人、御歌を續ぎて、かまなへて夜には、このよ日には十日を、と答へまつりしを、連歌の權興とするにより、尊の歌の詞をとりて、かくは名づけたる也。そも、連歌の拾遺金葉などの勅撰集にもいさゝか載せられし事は、上に云へり。當時連歌を撰集に入れたるに付きては、世に非難ありて、その後は又をさく、之を載せたるを見ず。然るに天下の流行は滔々として止まず、定家爲家などの歌人を始め、武家法師地下の輩に至るまで、相唱和して樂みしかば、遂にこの菟玖波集二十卷の世に出づる事とすなりし、さるに撰者は、猶世を憚りて、卑しきを耻づといへり。公の自序に、
連歌はつゝまやかに旨ひろくして、文の心にわたり歌のさまにかなへり。略中代々のひじりの帝も撰集に加へ、家々の道を得たる人も、式目をつくりて、久しく雲の上の遊び花のものとの戯れとなれり。月にうそぶき風にあざけるともがら、其の名聞こゆる類ひ、吳竹の世々に絶えずといへども、伊勢の海のかなさの玉拾ひ集めたるためし、少く和歌の浦のもしは草、かきかゆるあど

稀になん有りける略中こゝに朝によみ夕にまみゆる餘りのいとま少しといへども、道にふける志に堪へず、遂に集めて菟玖波集といへり、いにしへ今をわかず、上下の句を定めず、撰べる數ふたちゝにまされり、ことのおろそかなるを願み、後のあざけりを耻づといへども、どめれたるを僅かにしるせり、略中ちりひぢのいやしきことわざ、天つ空まで聞こわけて、かたむけなくもあろかなる心ばせをみそなはし、剩さへかしてさみことのに准らへらる。是れ即ち君も臣も体を合ふにわへる秋をわたりと云ふべし、時に文和五年三月廿五日なん記しおはりぬ、遠きを尊び近きを卑しくするならひ、古をしよと云ふとしかり。

とあるにて、公か此の集を撰みし、用意の程しられたり、かくて此の集勅撰に准ぜられしより、連歌いよく、面を起し、足利時代の末まで、ますます流行して、名匠たちも出来にけり、今本集中鎌倉時代連歌の体を示さん。
寶治元年八月十五夜百韵連歌に

山かけゝるき、雪のむら消えと侍るに

後嵯峨院御製

あら玉の年のこえたる道なれや

導譽法師家の千句連歌に

これや鎧の、いどのいろく

京月法師

卯の花の垣ほの草の下もよぎ

龜山殿にて大井川の鶉飼をゆして主水司の奉り

ける、ひを賜はせければうかひ見しり侍らざるに
や河の中へすてたりけるに

龜山院御製

かゞりならぬ、ひきはえ知らぬ鶉飼かな

權中納言公雄

なつは氷らぬ、みつにならひて

秀衡征伐のため奥州にむかひ侍りける時名取川
を渡るとて

前右大将頼朝

われひとりけふの軍に名とり川

平景時

君もろともにかちわたりせん

人々伴ひて鎌倉へ下向し侍るに行きつれたるか
のこ口すさみに云ひ侍りけるは

足あらひて、やくつのやきはく是れをきよて

鴨長明

てごよより、わらいな川をわたる人

鶯の尾の花の本より歸りけるに

花を見すて、歸る猿丸」と一人の云ひければ

俊成女

星まもる、犬のほゆるにおどろきて

梨を焼きけるにやけざりければ

前大納言爲家

からくしたれど、焼けぬ梨かな」と有りけるに

安嘉門院四條

おふの浦、あまのもゝほ火たきさして

修行し侍りけるに奈良路を行くとて尾もなき山
の丸木を見て

西住法師

世の中は、まん丸にこそ見えにけれ」と侍るに

西行法師

あそこもこゝもすみのつかねば

前大納言爲家

連歌をば、立ちながらこそ始めけれ」と侍るに

従二位行家

腰おれ歌は、居てぞよむべき

禪林寺仙洞にて爲言朝臣二藍の狩衣に裏したる
をきたりければ

後西園寺太政大臣

二重に見ゆる、ひとへ狩衣と侍るに

藤原爲言朝臣

裏もなき、夏のひとへもみへたすき

鎌倉時代には、いまだ連歌に一体の法式なかりけん、良基公の筑波問答に、御鳥羽院建保の頃より黑白また色々の賦しもの、ひとり連歌を、定家、家隆卿などに召されしが、百韻などにも侍るにや、云々近くは爲世爲相爲藤卿など、思ひ思ひの式目を作られなどして、賞翫せられし云々とあるにて知るべし。此の集を撰まれし後、應安二年に、公、救済周阿と計りて、連歌の新式を作らる。是れ連歌に立法の始めなり。此の後享徳中に、一條兼良公、宗禎と計り、彼の法を増補し、其の後また文應年中に、西三條實隆公、肖柏と共に、宗禎以下宗祇に至る迄の諸説を

集合して、新式始めて大成すといふ。委しくは文藝類纂にあり。足利時代の末に至りては、種玉菴宗祇、尤も此の道の名匠にして、門人はた多かりき。是れより連歌師といふもの出来て、公家には、連歌を嗜むもの尠くなり、遂に平民の手に移りたり。

かくて徳川時代に至り、平民文學の主要たりし、俳諧發句を生み出だせり。其の次第は又別に云ふべし。

歴代文學 續編畢

此の書を編輯したる趣旨は前編の首に記し置けり。但し續編を足利時代の末までにして、どちめたるは徳川時代を近世文學と題して別に編述せんと思へばなり。さるは前編も續編も文學史の参考材料とし、講讀の課本にも充てんの心構へなるに、徳川時代の文學には小説戯曲俳諧狂歌などの新に出來しものありて頗る多端なる上、これらの中には讀本とせんにいかゝなる性質のものもあり、所詮同じ體裁には成し難きにより、むしろ近世の方は課本にどの目的を離れて物せんと思ひ定めしなり。此の書を講讀の課本に採用せられんには、まづ續編より始めて、前編中古の文に及び、近く低きより、遠く高きに進ましむべし。さる心構へにて、此の續編には普通文を前に、擬古文を末に次第して、歌の類はいたく省約せり。古歌の講習は、やゝ進みたる上にくべくやと思はれてなり。

此の續編は、己れ病のために、鎌倉に在りし間、佐村八郎ぬしすべて校正の勞をとられたり。爰に記して謝意を表す。

明治廿八年三月

編者 志 齋

明治二十八年四月五日印刷
 全 年 全 月 五 日 發 行

定價 金 四 拾 五 錢

著 者 關 根 正 直

發 行 者 井 上 圓

印 刷 者 熊 田 宜 遜

版 權 所 有

發 行 所 哲 學 書 院

大 賣 捌 所
 大 阪 松 村 九 兵 衛
 大 阪 梅 原 七
 大 阪 川 瀬 代 助
 大 阪 吉 岡 平 助
 大 阪 上 田 屋 治 平
 大 阪 積 善 館 支 店
 東 京 小 林 新 兵 衛
 東 京 哲 學 書 院
 東 京 積 善 館 支 店

此の書を編輯したる趣旨は前編の首に記し置けり但し續編を足利時代の末までにして、どちめたるは徳川時代を近世文學と題して別に編述せんと思へばなり、さるは前編も續編も文學史の參考材料とし、講讀の課本にも充てんの心構へなるに、徳川時代の文學には小説戯曲俳諧狂歌などの新に出來しものありて頗る多端なる上、これらの中には讀本とせんにかゝなる性質のものもあり、所詮同じ體裁には成し難きにより、むしろ近世の方は課本にどの目的を離れて物せんと、思ひ定めしなり。此の書を講讀の課本に採用せられんには、まづ續編より始めて、前編中古の文に及び、近く低きより、遠く高きに進ましむべし、さる心構へにて、此の續編には、普通文を前に、擬古文を末に次第して、歌の類はいたく省約せり、古歌の講習は、やゝ進みたる上、すべくやと思はれてなり。

此の續編は、己れ病のために、鎌倉に在りし間、佐村八郎ぬしすべて校正の勞をとられたり、爰に記して謝意を表す。

明治廿八年三月

編者 志 る ず

明治二十八年四月五日印刷
 全 年 全 月 日 發行

定價金四拾五錢



東京市本郷區藤川町一番地

著 者 關 根 正 直

同 本郷區本郷六丁目五番地

發 行 者 井 上 圓 成

同 神田區錦町三丁目廿五番地 熊田活版所

印 刷 者 熊 田 宜 遜

同 本郷區本郷六丁目五番地

發 行 所 哲 學 書 院

大阪 松村九兵衛 東京 小林新兵衛

大阪 梅原龜七 大阪 吉岡平助

名古屋 川瀬代助 長岡 上田屋治平

東京 東京 堂 東京 群 書 城

東京 東 海 堂 博 多 積 善 館 支 店

大賣捌所

關根 編
正直

歷代文學

前編
頁數三百
定價五十錢
郵稅六錢

文運旺盛の今日、文學史の必要は言はずもあらむ、さるに吾在來のものにありては繁簡先後兎角にあかぬ點多くてあはれ一般の需要に適せず本書は研究の順序も正しく文學の發達も詳にうか引例の材料には今古東西に金科玉條ともて晰され歴史の眞鑑文學の模型となるべきものを撰ひ用意さも周到に物されたれば當年の文學史中最も上乘の位置を占むるものなり

●發行所

東京本郷六丁目

哲學書院

●賣捌所

東京
大坂

小林新兵衛○東京堂○弦卷○群書城
松村○梅原○吉岡其他各書林

44
244





